教科書文庫
4
815
41-1937
2000043507

現代中等日本文法

初學年用

八波則吉著

東京 大阪
英進社發行

41861
教科書文庫
4
815
41-1937
2000043507

資料室

昭和十二年十月十九日
文部省檢定濟
中學校・國語漢文科用

教科書文庫
4
815
41-1937
2000043507

375.9
Y220

現代中等日本文法

八波則吉著

東京
大阪
英進社發行

広島大学図書
2000043507

一　本書は昭和十二年三月二十七日改正の教授要目に準據し、中學校初學年用の國文法教科書として、口語法の大要を授ける爲に編纂したものである。

一　「規則を少くして練習を多くせよ。」といふ文法教授の原則に基き、説明を簡潔にして練習題を豐富にした。

一　既習事項との聯繫に注意し、練習題は主として尋常小學國語讀本中から採擇した。

一　講讀・作文との聯絡を密ならしめ、上級用との教材の排列をも考慮した。

廣島大學圖書之印

廣島大學教
43507
圖書

五十音圖

	ア行	カ行	サ行	タ行	ナ行	ハ行	マ行	ヤ行	ラ行	ワ行
ア段	あ	か	さ	た	な	は	ま	や	ら	わ
イ段	い	き	し	ち	に	ひ	み	い	り	ゐ
ウ段	う	く	す	つ	ぬ	ふ	む	ゆ	る	う
エ段	え	け	せ	て	ね	へ	め	え	れ	ゑ
オ段	お	こ	そ	と	の	ほ	も	よ	ろ	を

現代中等日本文法

初學年用

目次

總說……一
品詞
第一章　名詞……三
第二章　數詞……五
第三章　代名詞……七
第四章　動詞……一〇

第五章　形容詞……一三
第六章　助動詞……一五
第七章　副詞……一七
第八章　接續詞……二三
第九章　助詞……二四
第十章　感動詞……二六

用言の活用

第一章　動詞の活用形……三〇
第二章　動詞の活用の種類……三四
一　正格活用……三四

二　變格活用……四四
第三章　形容詞の活用……四九
第四章　音便……五一
第五章　助動詞の種類と活用……五六

文

第一章　文の成分……七〇
第二章　文の種類……七六

附表

一　動詞・形容詞の活用表
二　助動詞の活用表

東京大學圖書之印

現代

中等日本文法

初學年用

總說

一　春は樂しい。

二　櫻は日本の國花なり。

右の例のやうに、それ〴〵一つのまとまつた考をいひあらはしたものを**文**といふ。

文には、(一)のやうに、主として日常の談話に用ひるものと、(二)のやうに文章にばかり用ひるものとの二種がある。前者を**口語**といひ、後者を**文語**といふ。本書では專ら口語について說く。

文は、傍線を施したやうに、幾つかの言葉から組立てられてゐるも

口語　文語

のである。文を組立てるひとつ〳〵の言葉を**單語**といふ。

單語は、その意味や、働きや、形によつて、左の十種にわける。

名詞　數詞　代名詞　動詞　形容詞　助動詞　副詞

接續詞　助詞　感動詞

これらを、それ〴〵**品詞**と名づける。

練習

次の文を單語に分けなさい。

〔例〕青葉の上に、日が氣持よく照る。

一　雲が切れる、かもめが飛ぶ。

二　漁師の子供達が、あちらこちらで貝を拾ふ。

三　誰か川上の方で、さきほどから笛を吹いてゐる。

品詞

第一章　名詞

一　博多の沖は、見渡すかぎり、元から押寄せた船でおほはれた。

二　萠えて明かるい若草に、しと〳〵、細い雨が降る。雨はこぬかか絲のやう。

右の例の傍線を施した言葉のやうに、物事の名をあらはす單語を**名詞**といふ。

練習

次の文から名詞を選び出しなさい。

〔例〕今は櫻やなたねの花ざかりです。

一　やぶかうじの赤い實に並んで、春蘭のつぼみのふくらんだのも見える。

二　日本武尊は相模の國から、船で上總の國へお向かひになつた。

三　役場の前から横道へはいりますと、材木をたくさんつんだ荷馬車が來ました。

四　青・緑・紅・紫、目のさめるやうに美しい魚の群が、珊瑚の林や海藻の間をぬつて泳いで行く。

五　大阪驛からほゞ南へ、御堂筋といふ大通を進むと、やがて大江橋を渡つて中之島といふ所へ來ます。

六　大都會では、廣い通は、中央が車道といつて、電車や自動車が通る所になつて居り、其の兩がはに、歩道といつて、人の通る所がある。

七　あたまを雲の上に出し、四方の山を見おろして、かみなりさまを下に聞く、富士は日本一の山。

八　むらくもはらつて世界を照らす、日の大神の大御姿を、うつして仰ぐ日の丸の旗。あゝ嚴かな日の丸の旗。

第二章　數詞

一　一寸の蟲にも五分の魂。

二　十で神童、十五で才子、二十すぎてはたゞの人。

三　左に折れて第二の鳥居を過ぎ、又右に折れて第三の鳥居の前に出る。

四　五時間目の授業がはじまつた。

右の例の傍線を施した言葉のうち、(一)(二)はいくつと數量をあらはし、(三)(四)はいくつめと順序をあらはしてゐる。かやうに物事の數量や順序をあらはす單語を數詞といふ。

練習

次の文から數詞を選び出しなさい。

〔例〕昭夫は五百人中三番の成績で入學した。

一　これに具足一領、長刀一ふり、又あれには馬を一匹つないでもつてをります。

二　五十人は三隊になれ。中央の隊が十八人、左右の隊が各々十六人。槍のほさきを並べて一度に進むのだ。

三　アメリカ合衆國第十六代の大統領リンカーンは、今から百年餘り前、ケンタッキー州の片田舍の貧しい家に生れた。

四　或山寺で、四人の僧が一室に閉ぢこもつて、七日間の無言の行を始めた。小僧一人だけ自由に出入させて、いろ〳〵の用を足させた。

五　十月二十五日は、青年團の道ぶしんの日であつた。團員は午前七時、八幡神社の境内に集つた。總員三十二人が四組に分れて、それぞれ仕事の持場に向つた。

六　ルーブル博物館も一覽しましたが、りつぱな繪畫、彫刻の多いことは恐らく世界第一であらうと思ひました。又エッフェル塔にも登つて見ました。此の塔は世界最高の建物で、高さが三百メートルもあるさうです。

七　太陽のさしわたしは三十五萬四千里、即ち地球の百九倍餘りに當り、其の容積は地球の百三十萬倍に當つてゐる。溫度は表面で約六千度、内部に入るに隨つて益々高い。光の强さに至つては非常なもので、之を燭光でいへば一三の下に零を二十六もつけて表さねばならぬ。

第三章　代　名　詞

一　「それは私の着物でございます。」「いや、これは私が今ここ

でひろつたのです。」

二　叔父さん、ここはどこですか。

三　あちらでもこちらでも、さえたはさみの音がちよきんちよきんと聞える。

四　そちらへ行くのは誰か。君は彼を知つてゐるか。

右の例の傍線を施した言葉のうち、私・君・彼・誰は人の名の代りに、それ・これは事物の名の代りに、ここ・どこは場所の名の代りに、あちら・こちら・そちらは方角の名の代りに用ひられてゐる。かやうに人・事物・場所・方角の名の代りに用ひられる單語を**代名詞**といふ。

代名詞
體言

名詞・數詞・代名詞を總稱して**體言**といふ。

練習

次の文から代名詞を選び出しなさい。

名詞
數詞
代名詞
體言
結尾
變化せず

〔例〕此處代は何處代だらう。一體わし代は今までどうしてゐたのだらう。

一　「あなたはどなたでいらつしやいます。」「われは天皇の皇子（みこ）やまとをぐな。」

二　おとよ、大きくなつたなあ。わしはあちらに居てもお前の事ばかり心配してゐた。

三　それは餘りなお言葉です。私も日本男子です。

四　彼は急いで家に歸つた。其の夜はまんじりともせず机に向つて、かの曲を書きあげた。

五　海岸には所々に燈臺がありますから、それを見ると、あれは何所だといふことが分ります。

六　弟はあちらこちら暦をくつてゐるうち、ふと「八十八夜」の文字に目をとめて、「こゝに『八十八夜』とありますが、これは何ですか。」とたづねると、父は「それは立春から數へると八十八日目で、稻をはじめ

大ていの物の種をまく目安になる日だ。」と敎へた。僕はこの話を聞いて、珍しく思つた。

七　我々が談話をなすに當つては、誰に話すか、何を話すか、何處で話すかを注意せねばならぬ。

第四章　動　詞

一　笑ふ門には福來る。

二　峠には茶店はあるが、客は一人も居ない。

右の例の傍線を施した言葉のうち、笑ふ・來るは物事の動作をあらはし、ある・居は物事の存在をあらはす。かやうに物事の動作や存在をあらはす單語を動詞といふ。

練習

次の文から動詞を選び出しなさい。

〔例〕夜が明(動)けて鷄が鳴(動)く。東の空に日がのぼ(動)る。

一　吹く風はさわやかに、ふむ砂はさく〳〵と鳴る。

二　恩を知らぬ者は犬にも劣る。

三　舟は風にゆられながら、土橋の方へながれて行く。

四　瀧川から根室行の汽車に乘ると、約五時間後に石狩と十勝の境にある狩勝の峠にかかる。

五　かる、切る、掘る、運ぶ、誰も彼も一心不亂に働く。

六　見る物聞く物唯々驚く外はありません。

七　沖を走るは丸屋の船か、丸にやの字の帆が見える。

八　甲板洗がすむと、「顏洗へ。」「煙草ぽん出せ。」の令が下る。そこで始

めて乘員は顏を洗ふ。

九　身をすてて、皇國のために、まつしぐら、進む兵士の　しるしの軍旗、しるしの軍旗。

みぞれ飛ぶ　たまに破れて、戰のてがらをかたる　ほまれの軍旗、ほまれの軍旗。

十　打つも撫でるも親の恩。

第五章　形容詞

一　暖い晩だ。

二　山畑に稗の作つてあるのも珍しく、谷間に白い山ゆりの花のまばらに見えるのも面白い。

三　無い袖は振れぬ。

右の例の傍線を施した言葉は、いづれも物事の有樣をあらはしてゐる。かやうに物事の有樣をあらはす言葉で、いひ切る場合にいとなる單語を**形容詞**といふ。

練習

次の文から形容詞を選び出しなさい。

〔例〕若々しい梢の色は強い日光を浴びてゐる。

一　ひよどりは元氣な鳥だ。こんな寒い日にも、朝早くから、高い木の上をとびまはつて鳴いてゐる。

二　湖畔の家、道路を走る自動車、すべてが玩具のやうに小さく、玩具のやうに美しい。

三　天の橋立は海中へつき出た細長い洲で、長さは一里、はゞは四五十間。其の洲の白い砂の上に、青い松が一面に立つてゐて、長い橋のやうに見えます。

四　坂町を上つて小高い所に立つと、きつと港の景色が、高い建物の間や美しい町の上などに、油畫のやうに見えます。

五　寶石をちりばめたやうなかはいゝ目、紅をさしたかと思はれるやさしいくちばし、美しい羽毛に包まれた圓い胸、鳩は見るからに愛らしいものである。

六　昭和七年の夏、ロスアンゼルスで開かれたオリンピック大會に、日本の選手がめざましい活躍をしたことは、今も町の嬉しい話題になつてゐます。

七　封書には、いろ〳〵こみ入つた事が書いてあります。おめでたい事やたのしさうな事が書いてありますと、私もうれしいと思ひますが、悲しい事や苦しさうな事が書いてありますと、もらひ泣きをいたします。

八　「ねん〳〵ころりよ、おころりよ、ばうやは好い子だ、ねんねしな。」誰でも、幼い時、母や祖母にだかれて、かうした歌を聞きながら、快いゆめ路にはいつたことを思ひ出すであらう。此のやさしい歌に歌はれてゐる言葉こそ、我がなつかしい國語である。

第六章　助動詞

一　前方に湖が見え出した。

二　雨がまだ止まない。

三　起きようと思へば起きられる。

四　これだけはお目にかけたいと思ひます。

右の例の傍線を施した言葉のやうに、動詞の下に附いてその意味を助ける單語を**助動詞**といふ。

五　大阪は日本第一の工業都市である（だ）（です）。

六　月は盆のやうだ。

右の例の傍線を施した言葉のやうに、助動詞は稀に體言やのなど

の下に附くこともある。

七　とてもうちにじつとしてゐられない。

八　今夜は北斗七星がはつきり見られました。

右の例の傍線を施したものゝやうに、助動詞は更に他の助動詞の下に附いていくつも重なることがある。

動詞・形容詞・助動詞を總稱して用言といふ。

用言

練習

次の文から助動詞を選び出しなさい。

〔例〕　たとひ數年の軍功がみとめられず、このまま切腹を命ぜられても、石田めとは中直りは致さぬ。
（助動）（助動）（助動）（助動）

一　我々は、國語によつて話したり、考へたり、物事を學んだりして、日本人となる。

二　私はかねゝ古事記を研究したいと思つてをります。

三　空は水のやうにすみきつて、雲一つありません。

四　此の愛らしい小鳥が、いろゝの困難ををかして、遠い處まで使者の役目を務めると聞いては、誰でも驚かない者はあるまい。

五　號令につれて、つり床は正しく一定の場所に納められる。すべての窓や出入口は開かれる。

六　世界第一といはれるニューヨークは、全く高層建築の大都市です。

七　大空にそゝり立つ二十階・三十階の大建築、對岸オークランドへ渡す六千九百米のすばらしい長橋、さういふものを見ただけで、あゝアメリカだなと、つくゝ感じさせられました。

第七章　副詞

一　夏休になつたら、僕もきつと來る。

二　時間がまだ早い。

三　もう八重櫻も散り、行く春を惜しむ心がそろ〳〵胸にせまる。

右の例のきつと・まだ・もう・そろ〳〵のやうに、動詞・形容詞の意味を限定する單語を副詞といふ。

副詞は意味を限定する言葉のすぐ上に來るのが普通であるが、時としては右の例のもう・そろ〳〵のやうに他の語句を隔てて限定することもある。

四　船はいま靜かに歸る。

五　まだなか〳〵寒い。

右の例の歸る・寒いのやうに二つ以上の副詞によつて限定せられることがある。

六　少し斜にすわる。

七　もつと靜かに歩め。

右の例の少し・もつとはそれ〳〵副詞の斜に・靜かにの意味を限定してゐて、やはり副詞である。

八　汽車はおよそ三十分毎に電車はおよそ十分毎に發着する。

九　名殘はなか〳〵盡きない。

一〇　畢竟（ひつきやう）平素の注意が足らないのだ。

右の例の(八)のおよそは下の體言の意味を限定し、(九)のなか〳〵は下の語句の意味を限定し、(一〇)の畢竟は下の文の意味を限定してゐて、やはり副詞である。

以上述べたやうに、おもに動詞・形容詞の意味を限定し、時としては他の副詞・體言・語句・文の意味を限定する單語を副詞といふ。

練習

次の文から副詞を選び出し、どの語の意味を限定してゐるかをいひなさい。

〔例〕彼は頗る熱心に其の職務に從事した。

一　人はいよ〳〵勇み、馬はます〳〵はやる。

二　空飛ぶ鳥を見て、自分もあゝいふ風に飛んでみたいと思ひ、いろいろ工夫した人は、かなり古からあつたやうです。

三　朝晩めつきり寒くなつた。高い山はもう雪だらう。

四　枯れかかつて一面に黄色になつたじやがいも畑を、午後の日がかん〳〵と照してゐる。

五　正成は實にえらい人である。

六　汽車は野を過ぎ山を越えて進む。北上川はまだをり〳〵見えるが、いよ〳〵せまくなつて、とう〳〵谷川になつてしまつた。

七　珍しい植物はこの外にもまだたくさんあります。これ等の植物が茂つてゐる樣子は實に見事です。海の中もなか〳〵きれいです。

八　あなたはまだお若いから、しつかり努力なさつたら、きつと此の研究を大成することが出來ませう。

九　上海は交通上重要な位置を占めてゐて、外國との貿易ばかりでなく、支那の各地との取引にもきはめて便利であるから、港内には常に數百隻の船が集つてゐて、頗る壯觀である。

一〇　晴れた夜、空を仰ぐと、たくさんの星が、まるで寶石をちりばめたやうに美しく輝いてゐます。ちよつと見たところでは、ほとんど無數と見えるこれらの星にも、名前や、番號があり、位置もきまつてゐるのですが、たゞぼんやり見てゐるだけでは、一體どれがどれなのか、さつぱり見當が附きません。

第八章　接續詞

一　山また山を分けて行く。

二　君は行くか、それとも歸るか。

三　おほめにあづかつて恐れ入る。しかし部下の者は、最後までベルギーの名譽をけがさなかつたつもりである。

右の例の傍線を施した言葉のやうに、その上下の語句や文を結びつける單語を**接續詞**といふ。

練習

(一)　次の文から接續詞を選び出しなさい。

〔例〕　有難うございます。　接　しかし誠に粗末なビアノで。　接　それに樂譜もございませんが。

一　動物及び植物を生物といふ。

二　答案はペン又は鉛筆で書きなさい。

三　日光が店一ぱいにさし込んで來た。するとねぢが其の光線を受けてぴかりと光つた。

四　一體最も理想的な燈火は太陽の光のやうに明るくて、しかもほたるの光のやうに熱をともなはないものであります。

五　電氣は今やあらゆる方面に利用されてゐます。けれども其の利用は決してこれで盡きたのではありません。

六　國家の存立を危くし、國民の生活をおびやかすやうな危機は絶無であり、國内はおほむね平和であつた。隨つて國民は國の誇を傷つけられたことがなく、又其の誇を永久に持續しようとする心掛も出來た。

(二)　次の接續詞を用ひて短文を作りなさい。

〔例〕それに　雨が降る、それに風が吹く。
　　或は　且　しかしながら　さうすると
　　だから　ところが　尤も

第九章　助詞

一　桃の花は三月の末頃咲出す。
二　明日雨が降れば延ばさう。
三　浪が荒くても出帆しよう。
四　とう〳〵面會しないで歸つた。

右の例の傍線を施した言葉は、體言や用言の下に添うて他の語句との關係をあらはしてゐる。

五　けさこそにいさんよりさきに起きてみよう。
六　お前は誰か。

七　親の恩を忘れるな。
八　まあ、いゝ月だねえ。

右の例の傍線を施した言葉は、種々の語の下に添うて意味を強め、または疑問・禁止・感歎などの意味をあらはしてゐる。

かやうに種々の語の下に添うて他の語句との關係をあらはし、またはある意味を添へる單語を**助詞**といふ。

九　旅行には行かない。
一〇　國語こそは、國民の魂の宿る所である。

右の例の傍線を施したものゝやうに、助詞も重ねて用ひることがある。

練習

次の文から助詞を選び出しなさい。

〔例〕やれ打つな、はへが手をする足をする。（助）（助）（助）

一　やせ蛙まけるな一茶これにあり。

二　秋は蟲の聲から始る。

三　僕は今日學校から歸るとすぐ、おとうさんのお手紙を持つて、精米會社へお使に行つて來ました。

四　四國・九州の武士は博多の濱にあつまつた。元の兵は一人も上陸させぬといふ意氣ごみで、濱べに石垣をきづいて守つた。

五　打返す磯波にまき込まれたかと思へば、忽ち大波にゆり上げゆり下げられ、沖へ沖へとつき進む。

六　國語を忘れた國民は、國民でないときへいはれてゐる。

第十章　感動詞

一　あゝ、面白かつた。おや、北斗七星が半分杉林にかくれてしまつた。

二　やあ、正綱、十四歳の時が二度あるか。

三　「いや、きつと賴まれたであらう。」「いゝえ、賴まれたのではございません。」

四　これ、北八、お前これをかついでくれ。

右の例の傍線を施した言葉のやうに、感情の動く時や、呼びかけ又は應答の時に發する單語を**感動詞**といふ。

練習

(一)　次の文から感動詞を選び出しなさい。

〔例〕そら、一點はいつた。（感）

のだぞ。

一　あれ、松蟲が鳴いてゐる。　おい、君、優勝旗はもうこつちのも（感）

二　そら、もう一息だぞ。進め〳〵。

三　あら、てふてふが五郎さんの舟にとまりました。ほうら、もうぢきに勝負だ。

四　それ、もう日がくれるぞ。一本杉のうしろへお日様がおはいりになつた。あゝ、よい晩だ。一本杉のふところからお月様がお上りになつた。

五　やあ、皆さん御苦労ですね。今通つて見て來ましたが、大層立派になりました。よくこんなに早く出來ましたね。どれ、私もお茶を一つ御馳走になりませう。

六　にいさん、まあ何といふよい曲でせう。私にはもうとてもひけません。

(二)　次の文を各單語に分けて、それ〴〵その品詞の名を書きなさい。

〔例〕　鏡のやうな月が森の上に美しい姿を現した。
　　名　助　助動　名　助　名　助　形　名　助　動　助動

一　空はいよ〳〵すみ、月はいよ〳〵明かるい。

二　一番末の弟が、お供物のおだんごをたべたいと言出した。

三　さて〳〵、虹は美しい。赤・黄・みどりやむらさきと、七つの色をならばせて、空のゑぎぬへ一筆に、だれが書いたか、虹の橋。

四　靖國神社の青銅の鳥居は、實に大きい。恐らく、青銅の鳥居では日本一だ。それから、此の境内にある遊就館には、昔からの武器や、戰爭に關係のあるいろ〳〵の物が陳べてある。

用言の活用

第一章　動詞の活用形

國の爲に死なう。
國の爲に死にたい。
國の爲に死ぬ。
國の爲に死ぬ覺悟だ。
國の爲に死ねば本望だ。
國の爲に死ね。

右の例のやうに、死ぬといふ動詞は、その語形がいろ〳〵に變化する。かやうに語形の變化することを**活用**といひ、活用のおの〳〵の形を**活用形**といふ。

活用

活用する一語のうちで、變化しない部分を**語幹**といひ、變化する部分を**語尾**といふ。右の例の語幹は死で、語尾はな・に・ぬ・ぬ・ね・ねである。

活用形
語幹
語尾

動詞の活用は五十音圖の或一行のうちに限つて行はれるのが原則で、その活用形には次の六種がある。

㈠ **未然形**　右の例の死なは、「死なう」のやうに事がまだ成立たない意味をあらはす形であるから、これを**未然形**といふ。

未然形

㈡ **連用形**　死には、「死にたい」又は「死に絶える」のやうに、用言に連なる形であるから、これを**連用形**といふ。

連用形

㈢ **終止形**　死ぬは、文の意味をいひ切る場合に用ひられる形であるから、これを**終止形**といふ。

終止形

㈣ **連體形**　死ぬは、「死ぬ覺悟」のやうに、體言に連ねる場合に用ひら

連體形

假定形

命令形

動詞の活用形の見分け方

れる形であるから、これを連體形といふ。

㊄ **假定形**　「國の爲に死ねば本望だ」は、假定の意味をあらはす形であるから、これを假定形といふ。

㊅ **命令形**　死ねは、命令の意味をあらはす形であるから、これを命令形といふ。

動詞の六種の活用形を見分けるのには、次のやうにするのが最も便利である。

う
よう　に連なる活用形……未然形　死なう

たい＝に連なる活用形……連用形　死にたい

……いひ切る活用形……終止形　死ぬ

とき＝に連なる活用形……連體形　死ぬとき

ば＝に連なる活用形……假定形　死ねば

四段活用の命令形は**よ**・**ろ**に連ならない。「死ぬ」は四段活用である（後でいふ）から**よ**・**ろ**なしで命令形となる。

よ
ろ　に連なる活用形……命令形　死ね

なほ、活用形の名稱は、その用法の一部によつて便宜上附けたものであるから、この名稱がすべての用法を盡くしてゐるものと考へてはならない。

練習

次の文から動詞を選び出し、どの活用形が用ひられてゐるかを答へなさい。

〔例〕朝から麥を打つ（連體）音が方々で聞える。（終）

一　僕の學校に、大きな杉の木が一本ある。高さはどのくらゐあらうか。

二　機上から下界（げかい）をのぞくと、森、人家、道路、畠、さういふものが模型（もけい）圖の

やうにきちんとしてゐるのが見える。

三　我が國の古代精神を知りたいといふ希望から、古事記を研究しようと考へた。

四　猫が肥えれば鰹節がやせる。

五　雀の子、そこのけそこのけ、御馬が通る。

第二章　動詞の活用の種類

動詞の活用には次の五種類がある。

- 四段活用
- 上一段活用
- 下一段活用
- 正格活用
- 變格活用（カ行變格活用／サ行變格活用）

一　四段活用

一　正格活用

花も咲かう。　未然形

花が咲きました。　連用形

花が咲く。　終止形

花の咲く頃となつた。　連體形

花が咲けば見に行かう。　假定形

花よ、咲け。　命令形

語幹	語尾				
	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
咲	か	き	く	く	け	け
	ア段	イ段	ウ段	ウ段	エ段	エ段

右の例のやうに咲くといふ動詞は五十音圖のア・イ・ウ・エの四段に活用するから、これを四段活用の動詞といふ。

四段活用の見分け方

○咲くはカ行の四段に活用するから、カ行四段活用といひ、買ふはハ行の四段に活用するから、ハ行四段活用といふ。その他のものもこれから推して考へることが出來る。

動詞が四段活用であるかどうかを見分けるには、その動詞に**ない**又は**ぬ**を添へて見て、その上に來る語尾が**ア**段であれば、その動詞は四段活用である。

練習

(一) 次の動詞の活用を述べなさい。

〔例〕打つ　遊ぶ

幹	未	用	終	體	假	命
打	た	ち	つ	つ	て	て
遊	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ

タ四　ハ四

上一段活用

貸す　書く　走る　歩む　買ふ　放つ

(二) 次の文から四段活用の動詞を選び出し、その活用形を述べなさい。

〔例〕汽車は動き出した。（カ四、連用）　山を分け、川を傳ひながら上ると、（ハ四、連用）（ラ四、終止）　残雪がだん〳〵深くなる。（ラ四、終止）

一　何時の間にか機體が滑り出して、ぐん〳〵速力が加はる。

二　道路が十文字に交る。電車が走る。自動車が飛ぶ。人影が動く。

三　今年伐るはずのは、おとうさんの子供の時植ゑたのだといふが、もう幹のまはりの三尺もあるものが大分見える。

四　るり色の水に浮ぶルソー島、湖畔に連なる綠樹、白壁、はるかに紺青の空にそびえて雪をいただくアルプの連峯。久しく單調平凡な景色にあきてゐた私には、如何にも心地よく眺められます。

(二) 上一段活用

競技を見よう。

未然形

競技を見た。　連用形
競技を見る。　終止形
競技を見る人が多い。　連體形
競技を見れば面白い。　假定形
競技を見よ。　命令形

又

朝早く起きよう。　未然形
朝早く起きます。　連用形
朝早く起きる。　終止形
朝早く起きる人には幸がある。　連體形
朝早く起きれば快い。　假定形
朝早く起きよ。　命令形

命令形の見よ・起きよは見ろ・起きろともいふ。

上一段活用の見分け方

語幹	語尾					
	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
（見）	み	み	みる	みる	みれ	みよ
起	き	き	きる	きる	きれ	きよ

イ段

右の例のやうに、見る・起きるといふ動詞は五十音圖のイの一段だけに活用するから、これを**上一段活用**の動詞といふ。

動詞の活用が上一段であるかどうかを見分けるには、その動詞に**ない**又は**ぬ**を添へて見て、その上に來る語尾がイ段であれば、その動詞は上一段活用である。

練習

次の動詞の活用を述べなさい。

〔例〕着る　老いる

幹	未用	終體	假命	
(着)	き	きる	きれ	きよ	カ上一
老	い	いる	いれ	いよ	ヤ上一

射る　率ゐる　過ぎる　強ひる　盡きる　延びる

悔いる

下一段活用

㊂下一段活用

ボールを蹴よう。　未然形

ボールを蹴飛ばす。　連用形

ボールを蹴る。　終止形

ボールを蹴る子供がある。　連體形

ボールを蹴れば高く飛ぶ。　假定形

ボールを蹴よ。　命令形

命令形の蹴よ。受けよは蹴ろ・受けろともいふ。

又

質問を受けよう。　未然形

質問を受けた。　連用形

質問を受ける。　終止形

質問を受ける事が多い。　連體形

質問を受ければすぐ答へよ。　假定形

質問を受けよ。　命令形

語幹	語尾 未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
(蹴)	け	け	ける	ける	ければ	けよ

下一段活用の見分け方

受	け	け	ける	ける	けれ	けよ
	エ段					

右の例のやうに、蹴る・受けるといふ動詞は五十音圖のエの一段だけに活用するから、これを**下一段活用**の動詞といふ。

動詞の活用が下一段であるかどうかを見分けるには、その動詞に**ない**又は**ぬ**を添へて見て、その上に來る語尾がエ段であれば、その動詞は下一段活用である。

練習

(一) 次の動詞の活用を述べなさい。

〔例〕 得る　數へる

幹	未	用	終	體	假	命
(得)	え	え	える	える	えれ	えよ
數	へ	へ	へる	へる	へれ	へよ

ア下一　ハ下一

甘える　任せる　捨てる　改める　勝れる　植ゑる。

(二) 次の文から上一段活用と下一段活用の動詞を選び出し、その活用を述べなさい。

〔例〕 一命を捨てて君恩に報いよ。（タ下一、連用）（ヤ上一、命令）

一　昔の武士は、たとひ飢ゑて死ぬとも、二君に仕へることを恥ぢた。

二　荒海を見慣れた眼には、對岸を隣國と心得てゐるかも知れぬ。

三　「人は火を用ひる動物。」といふやうに、火を使ふのは人類ばかりで、他の動物には見られない。

四　垣根も倒れれば、しをり戸も外れる。まして稻田は大波が打つ。

二　變格活用

カ行變格活用

㊀カ行變格活用

早く來ない。　未然形
早く來た。　連用形
早く來る。　終止形
早く來る人もある。　連體形
早く來ればよいのに。　假定形
早く來い。　命令形

語幹		語尾	
(來)	未然形	こ	オ段
	連用形	き	イ段
	終止形	くる	ウ段
	連體形	くる	段
	假定形	くれ	段
	命令形	こい	オ段

右の例の來るといふ動詞は、こ・き・くる・くる・くれ・こいと五十音圖のイ・ウ・オの三段にわたつて活用する。これをカ行變格活用の動詞といふ。

カ行變格活用に屬する動詞は來るの一語だけである。

サ行變格活用

㊁サ行變格活用

勉強をせぬ。　未然形
勉強をしない。　連用形
勉強をし始めた。　終止形
勉強をする。　連體形
勉強をする人は成功する。　假定形
勉強をすれば合格するだらう。　命令形
勉強をせよ。

命令形のせよはしろともいふ。

語幹	語尾		
(爲)	未然形	連用形	終止形・連體形	假定形	命令形
	せ	し	する	する	すれ	せよ
	エ段	イ段	ウ段	ウ段	エ段	エ段

右の例の爲るといふ動詞は、せ(し・し・する・する・すれ・せよ)と五十音圖のイ・ウ・エの三段にわたつて活用する。これをサ行變格活用の動詞といふ。

サ行變格活用に属する動詞は爲るの一語だけである。

勉強する　論ずる　全くする　正しくする　詳にする　恣にする

右の例のやうに爲るは名詞や形容詞や副詞と結びついて、やはりサ行變格活用の動詞となることが多い。

練習

(一) 次の文から動詞を選び出し、その活用形を述べなさい。

〔例〕夕食後に日記をつけてゐると、私を呼ぶ聲がする。
（カ下一、連用　ワ上一、終止　ハ四段、連體　サ變、終止）

一　ロンドンの市街を見物して、私の特に感心したのは、市民が交通道徳を重んずることです。

二　手や足の關節を曲げたり延ばしたりして、出發の號令を待つ。

三　其の後宣長は絶えず文通して眞淵の敎を受け、師弟の關係は日一日と親密の度を加へた。

四　さをの先の扇を射よといふのでせう。

五　人は生活上の必要から發火法を工夫し、燃料を研究し、熱と火とをあらゆる方面に利用することを考へて來た。

六　山野に生ずる草木の中には、藥用にするものが多くありますが、其

の中貴重なものゝ一つは朝鮮人蔘です。

七　或日炭を燒く男が太郎のうちへ來てゐろりのはたでいろ〳〵の話をした。

(二)　次に並べた動詞の活用を述べなさい。

〔例〕　絶える　堪へる

幹	未	用	終	體	假	命	
絶	え	え	える	える	えれ	えよ	ヤ下一
堪	へ	へ	へる	へる	へれ	へよ	ハ下一

爲る（なす）　居る（をる）　來る（くる）（きたる）　生きる（生える）　改まる（改める）

第三章　形容詞の活用

形容詞の活用には**ク活用**と**シク活用**との二種がある。

(一)ク活用

水が清く流れる。　連用形
水が清い。　終止形
水の清い流がある。　連體形
水が清ければ飲まう。　假定形

(二)シク活用

風が涼しく吹く。　連用形
風が涼しい。　終止形
風の涼しい晩だ。　連體形
風が涼しければ行かう。　假定形

活用の種類	語幹	語尾			
		連用形	終止形	連體形	假定形
ク活用	清	く	い	い	けれ
シク活用	涼	しく	しい	しい	しけれ

○形容詞には未然形も命令形もない。

○「清く流れる」「涼しく吹く」のやうに、形容詞の連用形は多くは副詞の役目をする。

練習

次の文から形容詞を選び出し、その活用形を述べなさい。

〔例〕甲板洗はいかにも勇ましく（シク、活連用）面白い（ク、活連體）ものである。

一　せいが高く目がするどくて、ちよつと見ると、こはいやうですが、至つて正直で、氣立のやさしい老人です。

二　どうだ、美しいだらう。此の溫室は南を受けてゐる上に、十分熱い湯が通つてゐるから、こんなに早く咲くのだ。一度此の中にはいると、また寒い處へ出るのがいやになるね。

三　みねからすそにかけての若々しいこずゑの色は、強い日光を浴びて、一面に煙つてゐる。

四　下刈はいつも土用中にするので、ずゐぶん苦しいが、それでも木が競爭するやうに、しんを立ててすくすくと延びてゐるのを見ると非常にうれしい。木でも見下されるのがいやなのか、斜面などに植ゑた木は、低い處にあるもの程早く大きくなつて、こずゑの差が段々少くなつて行くのも面白い。

第四章　音便

語と語とが連なる時、發音の便宜上或音が他の音に變ることがあ

音便

る。これを**音便**といふ。

音便にはイ音便・ウ音便・撥音便・促音便の四種がある。

イ音便

㊀イ音便　**き・ぎ**が**い**に變るもの。

聞き。（聞い。て　聞い。た）

騒ぎ。（騒い。で　騒い。だ）

○右の外、口語で「ございます」「下さります」「下さいます」「下さいませ」と、**り**がいになることもある。

○イ音便の**い**を**ひ**又は**ゐ**と書き誤つてはならぬ。

ウ音便

㊁ウ音便　**ひ・く**が**う**に變るもの。

歌ひ。（歌う。て　歌う。た）

嬉しく。（嬉しう。存じます。　嬉しう。ございます。）

○ウ音便の**う**を**ふ**と書き誤つてはならぬ。

撥音便

㊂撥音便　**み・び・に**が撥ねる音**ん**に變るもの。

讀み。（讀ん。で　讀ん。だ）

飛び。（飛ん。で　飛ん。だ）

死に。（死ん。で　死ん。だ）

○撥音便の**ん**を**む**と書き誤つてはならぬ。

促音便

㊃促音便　**ち・ひ・り**が促る音**つ**に變るもの。

立ち。　立つ。て　立つ。た

笑ひ。　笑つ。て　笑つ。た

歸り。　歸つ。て　歸つ。た

○カ行四段活用の「行きて」は促音便にして「行つ。て」といふ。

練習

(一)次の文にある音便の種類を述べ、そのもとの音を示しなさい。

「例」飛んで火に入る夏の蟲。

一　ゴムの用途は年を追うて益々廣くなる。

二　床の間には、ずばらしく大きな鹿の角と三日月の前立との附いた

冑がかざつてある。

三　富士川が注いで、其の濁流を遠く海上に押出してゐるのが見られる。眞青な繪の具の水に、クリームを流し込んだ美しさだ。

四　日はよく照つてゐて、ふじの山はいつもよりなほきれいに見えました。風はしづかで、波も音を立てません。沖の方は霞んで、空と水とが一つになつて見えます。

五　明治元年三月德川慶喜征討の官軍は諸道より並び進んで、東海道先鋒は品川に、東山道先鋒は板橋に着いた。月の十五日を期して總攻撃を行ひ、一舉江戸を乘つ取る手はずである。

六　親子三人、庭にすゑた打臺の前に並んで、麥を打つてゐる。後には麥の束が山と積んである。それを一束づつ取つては兩手で根本の所をつかんで打臺にぱた〳〵とたゝきつけると、莖の先についてゐる穗が、敷いてあるむしろの上に面白いやうに飛散る。

七　ようこそお出で下さいました。まことにありがたうございます。

(二) 次の文に誤があれば、その理由を述べて正しなさい。

〔例〕願ふてもない事だと云つて、彼は勇むで任務に就ひた。
（う（ひのウ音便）　ん（みの撥音便）　い（きのイ音便））

一　謹むで新年のお祝ひを申上げます。
二　負ふた子に教へられて淺瀬を渡る。
三　先生に就ひて教を受ける。
四　何を言ふても聞ひてくれない。
五　朝に星を戴ひて出で、夕に月を踏むで歸る。
六　轉むでも笑ふてばかり雛かな。

第五章　助動詞の種類と活用

助動詞はその意味によつて、次の十種に分れる。

受身　可能　使役　尊敬　時　推量　打消　指定　希望　比較

受身の助動詞

㊀受身の助動詞

子が母に叱られる。

生徒が先生に褒められる。

右の例の**れる**・**られる**は、いづれも或動作を他から仕向けられる意味をあらはすから、これを**受身の助動詞**といふ。その活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
れる	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ
られる	られ	られ	られる	られる	られれ	られよ

可能の助動詞

㊁可能の助動詞

汽車でも電車でも行かれる。

この問題には答へられる。

右の例の**れる・られる**は、いづれもそのものの力で或動作をすることの出來る意味をあらはすから、これを**可能の助動詞**といふ。その活用は受身のれる・られると同様であるが、ただ命令形がない。

使役の助動詞

㊂ 使役の助動詞

父が子に繪を習はせる。

主人が下男に木を植ゑさせる。

右の例の**せる・させる**は、いづれも或動作を他のものにさせる意味をあらはすから、これを**使役の助動詞**といふ。その活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ
させる	させ	させ	させる	させる	させれ	させよ

尊敬の助動詞

㊃ 尊敬の助動詞

先生が海外に赴かれる。

父上は墓參せられる。

右の例の**れる・られる**は、いづれも他の動作を敬ふ意味をあらはすから、これを**尊敬の助動詞**といふ。

○「參ります」「申しあげます」の**ます**は、話の相手に對して敬ふ意味をあらはす口語で、その活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
ます	ませ	まし	ます	ます	ますれ	ませ

練習

次の文から受身・可能・使役・尊敬の助動詞を選び出しなさい。

〔例〕其の壯觀はとても筆や口ではつくされ（可）ません。（尊）

一　助けられるものならば助けてやりたい。
二　彼等が町人といつて賤しめられたのも其の爲であらう。
三　見ようと思へば、何時でも見られる。
四　ドイツ兵に發見せられて、野戰病院に送られた。
五　彼岸は七日の間で、其の中に、春は春季皇靈祭、秋は秋季皇靈祭を行はせられる。
六　暗い箱の中にしまひ込まれてゐた小さな鐵のねぢが、不意にピンセットにはさまれて、明かるい所へ出された。
七　さて、おしまひに一つ言つて置くことがあります。
八　母は門口まで送られた。いよ〳〵俥（くるま）が出ようとする時、悲しさうに、じつと私の顔を視て「ぢや、お前ねえ、からだを……。」とまではいはれたが、後は續けないで涙を浮べられた。

㊄時の助動詞　動作の行はれる時をあらはす助動詞で、過去・未來の二種に分れる。

時の助動詞

(イ)過去の助動詞

(イ)過去の助動詞

花が散つた。
競技會も終つた。

右の例の**た**は、或動作が今よりも前に起つた意味をあらはすから、これを**過去の助動詞**といふ。その活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
た	たら	たり	た	た	たら	

(ロ)未來の助動詞

(ロ)未來の助動詞

明日は雨が降らう。
間もなく日も暮れよう。

右の例の**う・よう**は、或動作が今よりも後に起る意味をあらはすから、これを**未來の助動詞**といふ。う・ようは活用しない。

よう　未來
やう　樣

○**ようをやう**と混同してはならぬ。

人に笑はれないやうに書いて見よう。

のやうは樣の字音でようは未來の助動詞である。

練習

次の文から時の助動詞を選び出しなさい。

〔例〕このことだけは覺えて置かうと思つた。（未來）（過去）

一　船長は外國から持歸つた寫眞帳を學校に寄附していつた。

二　突如として眼前に展開せられた風景は、雄大といはうか、豪壯といはうか、實に北海道第一の壯觀である。

三　役場のひけないうちに行つて來よう。

四　この道は遠いやうだから、あの道を行かう。

推量の助動詞

⑥ 推量の助動詞

山の櫻は美しからう。

頂なら海も見えよう。

霰が降るらしい。

右の例の**う・よう・らしい**は、いづれも物事を推し量つていふ意味をあらはすから、これを**推量の助動詞**といふ。う・ようは活用しないが、らしいは次のやうに活用する。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
らしい	○	らしく	らしい	らしい	○	○

打消の助動詞

⑦ 打消の助動詞

風が止ま（ぬ。ない。）

これはたゞ事であるまい。

右の例のぬ・ない・まいは、いづれも或動作を打消す意味をあらはすから、これを**打消の助動詞**といふ。まいは活用しない。ぬ・ないの活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
ぬ	○	ず	ぬ	ぬ	ね	○
ない	○	なく	ない	ない	なけれ	○

○この中、まいは推し量つて打消す意味をあらはす助動詞である。

○サ行變格活用の動詞がぬ・ないにつゞく場合は、

勉強をせぬ。

勉強をしない。

とするが正しい。

○次の例のないは助動詞ではなくて、形容詞である。

今日は風がない。

練習

次の文から推量の助動詞と打消の助動詞とを選び出しなさい。

〔例〕人はなぜ鳥類を研究しない（打消）のであらうと（推量）不思議に思ふやうになつた。

一　海藻は花は咲かない。根のやうな所も、陸上の植物の樣に養分を吸取るためのものではない。

二　からすのなかない日はあつても、五一ぢいさんがうたはない日はない。

三　よいあんばいだ。此のやうなら、今日は大したことはあるまい。

四　工場ではもう仕事がはじまつてゐるらしい。

五　交際の道を知らずむやみに人を信じない者は、思ひもよらぬ誤解

を蒙ることがないともの限らない。

六　もう人にはたよるまい。自分一人で修行をしよう。

指定の助動詞

㊅ 指定の助動詞

東京は日本の首府だ。
人は萬物の靈長です。
である。

右の例のだ・です・であるはいづれも物事を指し定める意味をあらはすから、これを指定の助動詞といふ。その活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
だ	だら	だつ	だ			
です	でせ	でし	です			

希望の助動詞

比較の助動詞

である	であら	であり	である	である	であれ	

㊈ 希望の助動詞

明日の試合に勝ちたい。

右の例のたいは、或動作を希望する意味をあらはすから、これを希望の助動詞といふ。その活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
たい		たく	たい	たい	たけれ	

㊉ 比較の助動詞

人生は夢のやうだ。

右の例のやうだは、物事を比較する意味をあらはすから、これを比較の助動詞といふ。その活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
やうだ	やうだら	やうだつ	やうだ	やうな	やうなら	

○やうですはやうだよりも鄭重な言ひ方である。

○やうだ・やうですは、

誰か來るやうだ。

明日は出來上るやうです。

のやうに推量の意に用ひられることもある。

練習

次の文から助動詞を選び出し、その種類を述べなさい。

〔例〕彼はなぜもつと勉強しないのだらう。（打消・指定・推量）

一　井戸端の柿は、まだ青いが、早く甘くなるたちだから、もうぢきに食べられる。

二　裁判の目的は、決して人を爭はせ、又は人を罰することではない。此の世を不道理や罪惡の行はれない、平和な、秩序正しい世の中にするのが其の目的である。

三　若い頃から讀書がすきで、將來學問を以て身を立てたいと、一心に勉强してゐた。

四　お知らせしたいことはいろ〳〵ありますが、大分長くなりましたから、今日はこれ位にしておきませう。

五　もはや調べさせる暇はないらしい。

六　火を使用するのは人類ばかりで、他の動物には見られない所である。

七　熱や光の作り方や利用の方法は、決してこれで完成したといふわけではあるまい。將來又どんなものが發明されるかも知れない。

八　何を見ても思出の種とならないものはありません。

文

第一章　文の成分

㊀主語・述語

主語　述語

鳥が　啼く。

彼は　勇ましい。

風が　吹いてゐますね。

右の例の鳥が・彼は・風がのやうに文の主題となるものを**主語**といひ、啼く・勇ましい・吹いてゐますねのやうに主題の動作・有樣などを述べるものを**述語**といふ。

このやうに文は主語と述語とが結びついて一つのまとまつた思想をいひあらはすもので、正式の文には必ず主語と述語とが備はつてゐる。

○一つの文に主語も述語も重なることがある。

父も母もたつしやです。

この品は新しくて美しい。

一郎も二郎も勉強し運動する。

㊁補語

補語

義經が平氏を討つ。

秀吉が關白となる。

影は形に從ふ。

禍は口から起る。

右の例で「義經が討つ」「秀吉がなる」「影は從ふ」「禍は起る」といふだけでは、文の意味が完全にならない。平氏を・關白と・形に・口からな

どの語が補はれて、始めてその思想が完全にあらはされる。かやうに述語の意味を補うてその文意を完全にする語を**補語**といふ。

○一つの文に補語が二つ以上あることもある。

頼朝、幕府を鎌倉に開く。

父は子に名を一郎とつけた。

主語・述語・補語は文の組立に必要な成分であるから、これを**文の主要成分**といふ。

文の主要成分

㊂ 修飾語

修飾語

美しい花が、咲く。

私は面白い文を作つた。

この室は大層涼しい。

右の例の美しいは花が、を、面白いは文を、を、大層は涼しい、を修飾する。かやうに主語・述語・補語を修飾する語を**修飾語**といふ。

○修飾語は幾つも重なつて同じ語を修飾する事があり、又他の修飾語を修飾することもある。

廣い深い湖水が森の中にあります。

飛行機が晴れた靜かな空を飛んでゆく。

群衆は東からも西からも集つた。

夕日が非常に美しく輝く。

㊃ 獨立語

獨立語

景色もよし、それに氣候も暖かである。

あゝ、よくかへつて來たね。

太郎や、これは何ですか。

會長は、會員がこれを互選する。

右の例の、それに（接續の語）、あゝ（感動の語）、太郎や（呼掛の語）、會長は（提

文の補助成分

文の成分の位置

示の語）のやうに、文の主要部から獨立するものを**獨立語**といふ。

修飾語・獨立語のやうに、文の主要成分を助けて、文の成立を完全にするものを**文の補助成分**といふ。

文の成分は、これを排列するにほゞ一定の順序がある。

春（主）が來（述）た。

子供（主）が父（補）に菓子（補）をやる（述）。

小さい（修）子供（主）達が面白（修）さうに遊んでゐる（述）。

あ（獨）、日（主）が出（述）はじめた。

右の例は文の成分が通常の位置にある。しかし、文の意味を強め又は言葉の調子を整へるために、わざと成分の位置を顚倒することもあり、また、文を簡潔にし語勢を強めるために、意味の明確を失はない範圍に於て或成分を省略することもある。

誰（二）ですか、あなた（一）は。

私（一）にも見（三）せて下さい、それ（二）を。

それ（一）は大變（三）でしたね、實（二）に。

もう（二）だめ（三）だ、あ（一）。

これは文の成分を倒置した例である。

（我々は）公園の樹木を愛しませう。

皆さん、こちらへ（おいで下さい）。

意見のある人は（それを）（私に）述べて下さい。

これは文の或成分を省略した例である。

練習

次の文について、文の主要成分・補助成分を指摘しなさい。

〔例〕鏡のやうな月が、高く秋の空にかゝる。

（修 主 修 修 補 述）

一　我等は日本人である。
二　大小無數の島々が各所に散在する。
三　新緑の野は最も私の心をひきつける。
四　心は持ちやう、氣は取りやう。
五　正直の頭に神宿る。
六　そんな事をあなたは誰から聞いたのですか。
七　福は內、鬼は外。

第二章　文の種類

文はその構造の上から、單文・複文・重文の三種に分ける。

㈠單文

春が來た。

父母の恩は、山よりも高く海よりも深い。

釋迦・孔子・キリスト・ソクラテスは世界の四聖である。

右の例のやうに、主語と述語との文法上の關係がたゞ一回だけ成立する文を**單文**といふ。

㈡複文

雨の降る日は陰氣だ。

所變れば品變る。

右の例のうち、傍線のある部分は、文が他の文の一部分となつたものである。かやうに、文が他の文の一部分となつたものを**節**といふ。右の例のやうに、文の主要成分を修飾してこれに從屬してゐる一つ以上の節を含む文を**複文**といふ。複文に於ては主語と述語との文法上の關係が二回以上成立つてゐる。

㈢重文

花笑ひ、鳥歌ふ。

垣は崩れ、屋根は漏り、壁は落ち、家は傾いてゐる。

右の例のやうに、二つ以上の對立した節を含む文を**重文**といふ。

重文に於ても主語と述語との文法上の關係が二回以上成立つてゐる。

練習

次の文の種類をいひなさい。

〔例〕能ある鷹は爪をかくす。（複文）

一　東山は月にもよく、又雪にもよい。

二　花の咲く春も近づいた。

三　人々は春の來るのを待つてゐる。

四　鳥は空に飛び、魚は水に泳ぐ。

五　今學年もやがて終りになります。

一　動詞・形容詞の活用表

動詞の活用表

活用名	語幹	語尾 未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
四段活用	聞	か	き	く	く	け	け
	押	さ	し	す	す	せ	せ
	立	た	ち	つ	つ	て	て
	問	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
	讀	ま	み	む	む	め	め
	歸	ら	り	る	る	れ	れ
	有	ら	り	る	る	れ	れ
	死	な	に	ぬ	ぬ	ね	ね
上一段活用	(着)	き	き	きる	きる	きれ	きよ
	(似)	に	に	にる	にる	にれ	によ
	(乾)	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ
	(見)	み	み	みる	みる	みれ	みよ
	(射)	い	い	いる	いる	いれ	いよ
	(居)	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ
	起	き	き	きる	きる	きれ	きよ
	落	ち	ち	ちる	ちる	ちれ	ちよ

形容詞の活用

活用名	語幹	語尾 未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
下一段活用	(蹴)	け	け	ける	ける	けれ	けよ
	(得)	え	え	える	える	えれ	えよ
	受	け	け	ける	ける	けれ	けよ
	寄	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ
	捨	て	て	てる	てる	てれ	てよ
	兼	ね	ね	ねる	ねる	ねれ	ねよ
	堪	へ	へ	へる	へる	へれ	へよ
	攻	め	め	める	める	めれ	めよ
	榮	え	え	える	える	えれ	えよ
	晴	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ
	植	ゑ	ゑ	ゑる	ゑる	ゑれ	ゑよ
カ行變格活用	(來)	こ	き	くる	くる	くれ	こい
サ行變格活用	(爲)	せ	し	する	する	すれ	せよ

動詞の活用表

活用名	語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
四段活用	聞	か	き	く	く	け	け
	押	さ	し	す	す	せ	せ
	立	た	ち	つ	つ	て	て
	問	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
	讀	ま	み	む	む	め	め
	歸	ら	り	る	る	れ	れ
	有	ら	り	る	る	れ	れ
	死	な	に	ぬ	ぬ	ね	ね
上一段活用	(着)	き	き	きる	きる	きれ	きよ
	(似)	に	に	にる	にる	にれ	によ
	(乾)	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ
	(見)	み	み	みる	みる	みれ	みよ
	(射)	い	い	いる	いる	いれ	いよ
	(居)	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ
	起	き	き	きる	きる	きれ	きよ
	落	ち	ち	ちる	ちる	ちれ	ちよ
	強	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ
	恨	み	み	みる	みる	みれ	みよ
	報	い	い	いる	いる	いれ	いよ
	懲	り	り	りる	りる	りれ	りよ
下一段活用	(蹴)	け	け	ける	ける	けれ	けよ
	(得)	え	え	える	える	えれ	えよ
	受	け	け	ける	ける	けれ	けよ
	寄	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ
	捨	て	て	てる	てる	てれ	てよ
	兼	ね	ね	ねる	ねる	ねれ	ねよ
	堪	へ	へ	へる	へる	へれ	へよ
	攻	め	め	める	める	めれ	めよ
	榮	え	え	える	える	えれ	えよ
	晴	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ
	植	ゑ	ゑ	ゑる	ゑる	ゑれ	ゑよ
カ變格活用行	(來)	こ	き	くる	くる	くれ	こい
サ變格活用行	(爲)	せ	し	する	する	すれ	せよ

形容詞の活用

活用名	語幹	連用形	終止形	連體形	假定形
活用	善	く	い	い	けれ
シク活用	美	しく	しい	しい	しけれ

種類	本形	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
受身	れる	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ
	られる	られ	られ	られる	られる	られれ	られよ
可能	れる	れ	れ	れる	れる	れれ	
	られる	られ	られ	られる	られる	られれ	
使役	せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ
	させる	させ	させ	させる	させる	させれ	させよ
尊敬	れる	れ	れ	れる	れる	れれ	
	られる	られ	られ	られる	られる	られれ	
	ます	ませ	まし	ます	ます	ますれ	ませ
時 過去	た	たら	たり	た	た	たら	
時 未來	う			う	う		
	よう			よう	よう		

種類	本形	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
推量	う						
	よう			よう	よう		
	らしい		らしく	らしい	らしい		
打消	ぬ		ず	ぬ	ぬ	ね	
	ない		なく	ない	ない	なけれ	
	まい			まい	まい		
指定	だ	だら	だつ	だ			
	です	でせ	でし	です			
	である	であら	であり	である	である	であれ	
希望	たい		たく	たい	たい	たけれ	
比較	やうだ	やうだら	やうだつ	やうだ	やうな	やうなら	

昭和十二年十月二十九日
文部省檢定濟
中學校・國語漢文科用

昭和十二年五月十日印刷
昭和十二年五月十五日發行
昭和十二年十月十日訂正再版印刷
昭和十二年十月十五日訂正再版發行

現代中等日本文法（初學年用）
定價三十七錢

著作權所有

著作者　八波則吉

發行兼印刷者　東京市神田區錦町二丁目七番地　佃要三郎

發行所　東京市神田區錦町二丁目七番地
振替東京七九五七七番
大阪市東區博勞町五丁目
振替大阪九八二〇番
英進社

56—78

長谷川

広島大学図書
2000043507